
術の世界

キダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

術の世界

【Nコード】

N0510S

【作者名】

キダイ

【あらすじ】

「私を、守ってほしいんだ」その少女は一人だった。家族はいない。みんな死んでしまったから。違う。家族は生きている。だが少女は一人だった。少年はその少女を守りたいと思った。最初は同情からでも、今は本気で守りたいと思っている。たとえそれが、この時だけのモノだとしても。これは少年と少女、二人が結んだ明後日までの約束の物語。

第一話（前書き）

これはまだ、不幸な少年の物語です。

第一話

ある世界のある所に、

全く我ながら馬鹿な事をやってしまった。と後悔せずにはいられない一人の少年がいた。

彼の名前はユアン・バロウズ。身長一六八センチ、髪と瞳が黒色で長くもなく短くもないヘアースタイルの、いたって健全な少年だ。

しかし彼は『健全』な少年ではあっても、決して『普通』の少年ではない。

生まれつき変わった力を持っていると言つのもあるが、彼は幼馴染の女の子からは『歩く変態』と貶され、男の子からは『ハッピー野郎』と嫉妬の視線を向けられて、挙句の果てには自分に生きる術を教えてくれた師匠にさえも『セクハラ装置』又は『トラブルメーカー君』と、おかしなあだ名を付けられてしまっている、自称トラブル人間だった。

そんな彼が今いるのは、水平線から漏れ出した太陽の光が、ほんの少しだけ差し込んでいる、廃れたとある酒屋だった。そして彼の前には二人の大男がビギビギと、とんでもない殺気を放って立っており、そのさらに後ろの壁にはロケットランチャーでも撃ちこんだのか？ と錯覚してしまうほどの大穴が開いていて、ついでにその壁の残骸であろう瓦礫の下には一人の大男の身体が転がっていて……。

彼は今日もトラブルに巻き込まれていた。

「……すべて『この町』が悪いんだ」

そう呟いているユアンだが、そのトラブルは半分彼の自業自得だ

ったりする。

自業自得、其の一

彼は不幸な体質だと言うこと。

それは遡る事一日前の夕方。ユアンはある街に行くため、長い間旅をしていた。

「あぢゝ、死ぬゝ、溶げるゝ、死ぬゝ、腹減つだゝ、死ぬうゝ」

旅をしていたのだが、彼は今死にかけている。リュックサック一つでサハラ砂漠並に広大で荒れた大地を、落ちていた木の杖を地面に突きながら、とぼとぼと力なく歩いて。

その理由は、今彼には食料もなければ水もない、絶望的な状態だったから。

じゃあなぜそんな状態になったのかと言うと、今朝の事。

気が付いたら水と食料の入っているルーズバッグが消えていたからだ。

そう。たつたそれだけ。何も難しくはない。とても簡単なこと。

「ふざけんなー！ そんなんで割り切れると思ってんじゃねーぞおおお！」

広大な大地の中心で、ユアンは大空に向かって絶叫する。

食料を無くした彼はもちろん朝から何も口にしていない。拾い食いでほしいところだが生憎落ちている物と言えば石と枯れた雑草ぐらい。いつ餓死してもおかしくない状況だった。

「ちくしょう、一体俺のバッグはどこに消えたんだよー」

泣きたいのに、涙も出せない少年がここに一人。

そのおかげで本来予定にはなかったが水と食料を調達するため、仕方がなく旅の進路を変えて町を探していたら、レンガ作りの建物が多い名も知らぬ『この町』を見つけた。彼の最初の予定では水と

食料を調達したらすぐに町を出る予定だったが、その時には日も沈みかけの夕方だったから、食料調達は明日にして今日は一晚泊まる事にした。

幸いお金は消えてなかったし宿はすぐに見つかったからよかったが、彼は相当疲れていたのか部屋を借りた早々、飯も食べなければ荷物も片付けずに、ベッドにダイブして寝てしまった。

ユアンが次に目を覚ました時には、外はまだオレンジ色に染まっていた。

まだ夕方なのか？　と思ったが彼が『この町』に入っただのは確かに夕方だったが、宿を見つけて部屋に入った時には既に外は暗かったような気がしたと思い、ユアンは寝ぼけた頭で状況を整理して、

「ああ、朝か」

と、太陽の光が西から射しているのにも関わらず、彼はそう判断した。

そのまま起き上がったユアンは『思ったよりよく寝たな』と一人事を言いながら、洗面台で顔を洗う。そして着替え中に腹が減ったと感じたので、どこかで飯でも食いにいこうと考えたユアンは、宿の外に出て飯屋を探した。

「まだ朝なのにこの町は元気だなあ」

外に出ても今が夕方だと気付かないユアンは、人通りの多い町の中央通を歩いていく。

そして彼は全ての元凶である、とある酒屋の前で足を止めた。

自業自得、其の二

彼は自分からトラブルの起こりそうな所に行く癖があること。

それは宿の三つ隣にある西洋風の古びたバーで、中からは男達の笑い声や怒鳴り声が聞こえてくる、とにかく騒がしい店だった。し

かしユアンはその時何を思ったのか、その店で飯を食う事に決めて、店の中に入って行く。

扉を開けると中は煙草の煙が充満していて、店に客が何人いるのか分からないほど曇っていた。だが聞こえてくる低い男の喋り声からして十人以上はいるだろうと推測し、

（まったく朝っぱらから酒と煙草に浸かっているとはダメな人間ばかりだな『この町』は。まあ俺も人の事言えねーかハハハハハ）

と思いながら彼はそのまま店の奥へ進んでいく。そして横に伸びて細長いテーブルの前にいくつか並んでいる、足の長い丸い回転椅子に腰をかける。そのテーブルの一番端っこに赤い長髪の女が一人座っているようだったが特に気にせずに、ボロい店には似合わないタキシードを着ていて、ガラスのコップを白い布で回しながら丁寧に拭いているごつい体つきの店員に、ユアンはハードボイルド風にかっこよく、

「アールグレイをくれ」

と、紅茶の名前を言った。バーなのに。酒を飲む店なのに。当然その店員は、

「すいませんお客様。ここは喫茶店ではございませんので紅茶は置いておりません。どうしてもお飲みになりたいのなら別の店に行きやがってください」

と、かなり丁寧な？ 口調でお断りなされた。まあ当たり前な反応だと言えば当たり前なのだが。ユアンは店員の丁寧な？ 注文のお断りを聞いた瞬間顔が青ざめ、震える声で、

「え？ なに？ アールグレイって酒の名前じゃないの？ 俺力クテル的なモノだって聞いたんだけど」

「アールグレイはフレイパーティーの一種で列記とした紅茶ですよ」

「……うそ、」

ユアンはそれ以上言葉が出なかった。まず絶句と言う無言の驚きが顔一面に浮かび上がり、次に恥ずかしさが体の底から湧き出てきた。無駄に格好をつけて注文した事がさらに彼を辱め、店員の顔を

直視できなくする。そしてその感情は徐々に間違った知識を教えた自分の師匠に対する怒りに変わり、最終的には復讐と言ふ二文字に変換された。

次会ったら俺のなんかより百倍恥ずかしい思いをさせてやる！

と心の中で誓いつつ、ユアンは気を取り直して今度は絶対に酒だと分かるものを注文する事にした。

「んじゃあウイスキーある？」

これは大抵の人間なら知っている単語だな、と彼は安心しながら注文する。のだが、

「失礼ですがお年はおいくつでしょうか？」

「ん？ 今年で十六だけと？」

「申し訳ございません。未成年の方の飲酒は違法なのでその注文はお受けできません」

「……」

まあそれも当たり前な事で、なぜユアンはそこでまた絶句するのかが逆に不思議なのだが。

しかしその前にこの店員は、バーに未成年者が居る事はなぜかつこまなかった。

二度も注文を断られたユアンは、内心少し落ち込みながらも、弱い声で、

「それじゃあオレンジジュースある？」

これならあるだろ無いほうがおかしいだろ、と彼は今度こそ確実な選択をしたつもりだった。だったのだが、

「すみませんお客様。当店はお子様の入店をお断りしておりますので」

「……、」

ユアンは泣きたくなかった。結局のところこの店員は遠まわしに『さっさと帰れ』と言っているだけじゃないか、と思ったが、ここで挫けたら相手の思う壺だと考え気を取り直して、自分が注文できるものを聞いてみる負けず嫌いな未成年ユアンだった。

「……あの、じゃあここ何があるの？」

「当店は基本酒類しか扱っておりませんのでお客様が注文できる商品は限られてきますのですが」まあバーだから、酒を頼む所だから仕方のない事なのだが。「ですがミルクぐらいならありますけど、どうなされますか？」

ミルクはちよつとなー、と思ったが店員がせっかく進めてくれたのに断るのもある意味失礼かなと考え、仕方なく注文を受ける事にした。

「そうか、それしかないのか。じゃあミルクでいいや。ミルクくれるか？」

「かしこまりました。少々お待ちを」

店員は軽く頭を下げると手に持っていたコップと布をテーブルの上に置き、ミルクの用意をしに店の置くへと消えていった。

一体注文一つにどれだけ時間掛けてんだよ、と心の中で思っている反面、やっと注文が通ったと言う安堵感に浸っている、そんな自分の裏の感情に気付かずユアンは、

（あーあミルク冷えてたらいいなーんな訳ねーよなぜってーぬるんぬるんなだろーなーってぬるんぬるんってなんだ？　なんかぬるぬるしてるみたいでちよつと気持ち悪い表現かも）

と、どうでもいい事を口の中で呟いていたら、店員が店の置くから白い牛乳の入ったガラスのコップを持って出てきた。

「お待たせいたしました。ご注文の品です。どうぞ」

店員はテーブルに正方形の白い紙を敷いてその上にコップを置く。その時コップに何か違和感を覚えたがユアンは気にせずにコップを手にとると、指先に冷たい感覚が伝った。

「……冷えてる」

「はい」

店員の優しい返事と心遣いにユアンは泣きそうになったが、泣いていたらミルクがぬるくなりそうだったので早いとこ飲んでしまおうと思い、コップに唇を付けミルクを口の中に流し込もうとした。

だが、口の中にはミルクは一滴も落ちてこなかった。

ユアンはコップを口に付けたまま縦に振って横に振って前に頭を振って。しかしミルクは一滴も落ちてこなかった。まるでコップの中にミルクは確かに入っているのに何も入っていないような、変な感覚だ。ユアンは一度コップから口を離してその中身を確認めるように凝視する。

「え、何これ。え、何なの？ これ」

そしてユアンの視界には白い物体が、コップにぴったりと収まっているように映っていた。

「どうですかそのミルク。それうちで飼ってる犬の口の大好物なんですよ」

「犬?! 犬ってこれ犬用のミルクなんですか?!」

「はいそうですけど」

「……っ」

ユアンは一瞬声が出なくなった。店員が客に犬用のミルクを普通に何ともなく出してくるのだから。そんな店員に又もや絶句しつつも、彼は自分の精神をしっかりと保って、しかしコップを持っている手はカチカチと震えて、

「犬用ってのにもいろいろつつこみたいんだけど、まあこの際それは置いて、一つ聞いていいですか？」

「何です？」

「ミルクって確か液体ですよね？」

「はい。そうですけど、何故そんな当たり前な事を？」

「いやだってこれ、固体だもの。液体じゃなくて固体だもの。つか凍っているもの!」

「そうですか」

「あ、いやそうですかじゃなくてこれ凍ってませんか？ 凍ってますよね、これ。コップ逆さまにしても一滴もミルク落ちてきませんしそもそもコップ異常に冷たいし!」

ユアンは言葉の勢いでコップの底をテーブルに叩きつけ、焦りを

強調するが、

「それではごゆっくり」

「あの何俺の話完全スルーしてんですか。ごゆっくりって何？ 溶けるまでここに居ろって意味？ ねえ聞いてますか？ 何これイジメ？ 新種のイジメですかあ？？？？？！」

しかし彼の叫びも虚しく店員はそのままどこかへ行ってしまった。（何なんだよ一体あの店員は！ 何考えてんだよ！ 俺あの店員に今日一日で四回絶句させられたぞ。ほんと意味分かんねーよあいつ！）

彼は一先ずコップから手を放すと、今日始めて会って名前も知らない人にイジメられたショックで、テーブルに頭を伏せて夜鳴き体勢に入ってしまった。

そう、まさにこの時だった。奴らが現れたのは。

後ろの扉がドンッ！ と勢いよく開け放たれ、三人の大男が店に荒々しく入ってきたのは。

ユアンはその音を聞いて、頭を伏せたまま顔を覗かせるように後ろを見る。

そこには双子らしき顔つきも体つきも髪の色（黒）や型までも対照的で、左は赤いＴシャツで肌が茶色く、右は青いＴシャツを着ている（下はジーンズを履いている）白い肌の大男。そしてその間に金髪で赤色と青色が左右に真っ直ぐ分かれたＴシャツを着ていて（こっちも下はジーンズを履いている）、薄く焦げた肌の双子と同じぐらいの大男が一人立っていた。

ついでに付け加えると大男達の着ているＴシャツはみんなぱつぱつぱつぱつだった。

（何だよあれ、すげー服のサイズあってねーしそもそも何あのセンス。見てるこっちが恥ずかしくなってくるんだけど、）

ユアンは迷惑そうな目で三人組の男を見ていると、近くからこそ

こそ話をする声が聞こえてきたので、なんとなく視線は変えずに耳だけをそちらに傾けた。

『……おいあれって『この町』最強の魔術師じゃねーか?』

(あれが『この町』最強の魔術師い?! どう見てもこの町最強の変態だろ。Ｔシャツぱつぱつぱつぱつで乳首浮き出てるもの。ジーンズの股間部分、異常にもっこりしてるもの!)

心の中でツツコミながら、彼は話しの続きを聞く。

『ああ。あいつら自分達より強い奴がこの町にいねーからって最近好き勝手に店を荒らしてるらしいんだよ。ほらこの店の向かいに武器屋があつたろ? 今は壁やら床やらが壊れて廃墟になっちまってるけど。実はあれやったのあいつらなんだよ』ユアンはそういや向かいにそんなようなボロボロの建物があつたなー、と思いながら『しかも店潰した理由が「武器をタダで遣さなかった」からなんだよ。まったくそんな理由で店潰されちまったらたまったもんじゃないぜ。ほんと迷惑な連中だよ』

『て事は何か? あいつらこんどはこの店に目を付けたってこのなのか?』

『そうじゃねーの? まあ何にしても早いとこ、この店から出た方がいいな……』

????この町最強で自分達より強い奴がないから調子にのっている。

「……」

ユアンは無言のまま後ろから視線を外すと、そのまま再び頭をデューブルに伏せる。

「オラオラオラア! ここの店長呼んでこいやゴラア! じゃねえとぶつ殺すぞゴラア!」

「早く呼んで来ないとこの店潰しちやいますよ?」

ベッタベタな脅し文句を言い散らしているのは双子の内の赤い服を着た大男の方。澄ました口調で物騒な事を言っているのは青い服を着た大男の方。

双子の兄弟は周りを脅すように罵声をとばす。周りにいる客から時々悲鳴も聞こえてきたがほとんど黙ったままだった。耳だけで周りの状況を判断しながらユアンは、
（全くうるせー野郎達だな。こっちは色々ショックな出来事が重なってブルーなのによ）

はぁ、と心の中で溜め息を付きつつ、さつさとこの場から消えてくれる事を祈りながら、ユアンは目立たないように顔をテーブルに伏せている。

しかし彼は気付いていない。
その行為がこの場で一番目立っている事を。彼は自分がこの場で一番目立っている事を。

自業自得、其の三

彼の行動はどこか空回りしてしまっていること。

周りはみんな恐怖で引きつった顔をしているのに、一人だけバーの椅子に座りながら頭をテーブルに伏せているなんて、しかも後ろから見たら今の状況に全く恐怖していないみたいな感じで、逆に彼らを挑発しているようにも映る。

そんな事にも気付かずにユアンは頭を伏せたまま動かない。三人の大男達から見たら、のん気に寝ているように映っているのだろう。そんな彼の態度に赤いＴシャツを着ている大男がついに耐え切れなくなり、

「おい、そのてめえ！ んだその態度はなめてんのかゴラア！」
（おいおい誰だよ目付けられたのは。こっち側に向かって怒鳴ってるから俺の近くにいる奴だな。全く勘弁してくれよこれじゃあいつらさつさと帰らねーじゃねーか）

ユアンは自分に向かって言われている事に全く気付かず未だに頭

を伏せたまま。そんな彼の態度に赤いＴシャツの男はさらに怒りを覚え、

「てめえ調子に乗んのもいい加減しろよゴラア！」

ゴラア！　が口癖なのかな？　と思っているユアンに赤いＴシャツの男が殴りかかろうと、拳を思い切り握り締め一歩前へ足を踏み出した時、それを止めるように男の肩を赤青のＴシャツを着た大男が握った。それに反応して赤いＴシャツの大男はもう一歩進めようとした足を一旦止めて後ろを振り返ろうとしたが、それも止めた。なぜなら既に肩を握った大男が先に歩き出して、ユアンの元に行こうとしていたからだ。あれだけ騒いでいた双子の大男達は進んでいく一人の大男の背中を黙って見ているだけだった。

赤青のＴシャツを着ている大男は周りにいる人間に、彼が一行くだけで地面が揺れているような錯覚を感じさせていた。ずっしりと重い一歩を、左右交互に何度も繰り返しながら、大男は（背中から見たら）寝ている（ように見えるだけ。実際は起きてます。さつさと彼らが帰ってくれるのを心の中で真剣に祈っています）男に近づいていく。

そして大男はユアンの右斜め後ろに無言で立ち止まった。その距離は約二〇メートル弱。

（……あれ？　何か足音が止んだぞ？　しかも俺の近くで）
そう思ったが彼はまだ気付いていない。自分が狙われている事を。鈍感にも程がある。

そしてこれだけ近づいても何も反応しないユアンに対し、赤青のＴシャツを着ている大男は無言のまま太い右腕を肘を曲げて横に挙げる。

その掌は硬く握られ、左足を一歩前に大きく踏み出し肩を引くと、

瞬間！　ユアンの横腹に硬い拳を殴りつけた。

拳は彼の横腹に抉りこみ、そのまま身体ごと左に吹き飛ばす。

猛烈な勢いで飛んでいくユアンの身体は、横にくの字に折れ曲がった状態で店の壁にぶち当たったがそれだけでは止まらず、そのまま壁ごと破壊した。壁が崩れる音が店の外まで響き渡り、殴られ吹き飛ばされたユアンの姿は瓦礫から出た砂埃に隠されて、どうなったのか分からない。だがその光景を目の当たりにした者は皆こう思っている。

「死んだか」

鼻で笑いながら言った赤いＴシャツを着た大男は、破壊された壁から視線を外し店の中央へと足を進める。それに続くように青いＴシャツの大男も歩き出し、

「これで分かりましたか？ 今あなたがたがおかれている状況を。その気になればいつでも殺せますですよ、私達は」

それは脅迫だった。力で市民を捻じ伏せ言う事を聞かせる。

だがこんな光景はこの世界では何も珍しくはなかった。力がある者が支配し、力がないものはそれに付き従う。いつの時代も人間のやっている事は何一つ変わっていない。

「さっさと店長出て来ねーと、ここにいる奴全員店ごと潰すぞ」

狂気の籠った声を放ったのはユアンを殴り飛ばした大男で、恐らく三人の内のリーダー的な存在だ。彼の言葉にビビって店の奥から一つの人影が出てきた。それはユアンに凍ったミルクを渡した店員だった。どうやらこの店の店長でもあったらしい。彼は大男と机を挟んだ位置に立っている。

「どうして早く出てこなかったんだ？」

殺意の満ちた声で赤青のＴシャツを着たリーダー的な大男が、彼よりも少し身体が小さい（それでも男の中ではかい方）店員且つ店長の男に問い掛けた。

「すまん」

店長は軽く頭を下げる。しかしそれと同時にタキシードの中にそっと片手をつ込み、

「ちよつと用意したいものがあつてな！」

叫びと共に服の中から即座に黒い回転式拳銃を取り出した。銃身は短く護身用に持っていたものだろう拳銃は、既にハンマーが下ろされていて大男の心臓部分に狙いを定めている。銃口と大男の心臓との距離は二〇センチもない。どう足掻いても回避する事は不可能。そして店長は引き金に掛けた指に力を入れて、

パンッ！ と店に甲高い音が店に響く。

ポタ、ポタと、赤い液体が木の床に一滴一滴落ちていき、男の身体が後ろに倒れていく。

そう、店長の身体が。

頭から赤い鮮血を噴出して。ゆっくりと重力に引かれるように。店長の身体は頭から後ろの棚にぶつかり、ずるずると地面に座り込むように沈んでいく。そしてそのまま上半身は横に倒れ、だらだらと赤い液体が頭から溢れてあつと言う間に床が血溜まりになる。そうして店長はそのまま動かなくなった。

.....。

店中が静まり返る。

悲鳴は、ない。

もしここで叫んだら殺されると分かっているから。

「悪いなゴブ。手間掛けさせちまって」

撃つたのは青いＴシャツを着た大男だった。彼の名はゴブ。銃を使い早撃ちの天才だ。

「いえ、こんな事朝飯前ですよ。それよりあなたも少し気を抜きすぎでは？ ダグドラさん」

そしてユアンを殴り飛ばした大男がダグドラと言う双子のリーダー。

「それにしても相変わらずすげーな、お前の早撃ち。銃抜く所見えなかったぞ」

最後に赤いＴシャツの大男、名はバグ。怪力の術を使い一トン以上もある巨大ハンマーの使い手。青いＴシャツを着た大男ゴブはバグの言葉に対し鼻で笑って、

「こんな銃のド素人にこの私が遅れを取る訳がないでしょうが」

「まあそれもそうなんだがな。ガハハハハハハ」

「無駄話はそれぐらいにしろ。それよりもこれでこの店の所有者は消えた。正当防衛、でな。だからいくらこの店の物を奪ったって誰も文句言わねーよな！」

あまりにも理不尽な言い草に、しかし周りの者はただ黙って見ているしかなかった。

誰しも自分の命が一番惜しいから。誰しも死にたくはないから。

ダグドラはすぐさま金目の物を漁ろうとテーブルに右手を置き乗り越えようとした、

その時だった。

ゴロツと瓦礫でも動かすような物音と共に、彼の左から猛烈な勢いで何かが飛んできて、

ドンッ！　と言う爆発じみた音と同時にダグドラの顔面を殴り飛ばしたのは。

顔面に掛かる強烈な力にダグドラの身体は耐え切れず足の裏が地面から離れ、そのまま右側の壁に頭から突っ込んで行く。そしてそれだけでは止まらず壁を突き破り、大男の上から壁の瓦礫が降り積もる。そしてそのままダグドラは埋もれて動かなくなった。

「……」

突然視界から消えたりーダーに対し、双子の大男兄弟はしばらく止まったままだった。しかし数秒経って我に返った二人は名前を呼ぶなりダグドラの元に掛けよる。そして死んではないものの完全

に気絶している自分達のリーダーを見て、

「アニキ！　しっかりしてくださいだせアニキ！」と身体を揺さぶったり、頬を叩いたりして何とか意識を取り戻させようとしている。だが、「くそ、完全にのびちまっている。こりや目え覚ますのに時間掛かるぞ。それより誰だアニキを吹っ飛ばしたクソ野郎はゴラア！」バグは絶叫しながら後ろを振り返る。そして吹っ飛ばした張本人が彼の視界に入り、

「……てめえは、」

その姿に見覚えがあった。

知り合いと言う訳ではない。

だが確実に知っている。

黒い短くもないけど決して長いともいえない髪に、腿丈程度のぶかぶかハーフコート、右手首には銀の鎖の腕輪に繋がれた日本刀の柄だけストラップがぶら下がっていて、黒いズボンに白いラインが両側面に真っ直ぐ入ったプーマジャージ的な物を履いている、ついさっきダグドラが殴り飛ばして、死んだはずの男。

「……あの一撃を受けて、死んでなかったのか」

バグはその男に刺すような視線を放ち、ゴブも同じくそれに目を向け睨みつけている。

自業自得、其の四

彼は後先考えない行動をすること。

対して睨みつけられている張本人、ユアン・バロウズは顔を下に向け立っているだけ。

彼は殴り飛ばされ壁に激突した後少しの間気を失っていた。そして銃声のような音で目を覚まし、腹部に痛みがある事に気付く。そのまま自分が殴られた事を思い出し、なぜかもの凄く腹が立って、

直接は見えていないが恐らく殴った本人であろうと判断したテーブルの前に立っていた大男に、人間ではあり得ないスピードで襲い掛かりそのまま殴り飛ばした。

それがユアンのこれまでの経緯^{いきれつ}。

ユアンはダグドリを殴り飛ばした時の拳に力を込めた体勢で固まったままだった。そして少しずつ力を抜いて、普通に立っている体勢に戻る。

辺りは静まり返っていた。不自然なぐらいに。何が不自然なのかと言うと店に殴り込みに来た大男達も黙り込んでいたからだ。

そして彼は気付く。その大男の視線に。殺意の籠っているその血走った眼光に。

彼の頭は殴られたショックのせいか、一時的に冷静さをなくしていた。だがその状態は徐々に平常に戻っていき、思考回路も正常に戻っていく。

だがそれは今のユアンにとって、苦しみ以外の何者でもなかった。怒りが浮き出た形相から、驚きと後悔と絶望が合体した意味不明な表情に変わっていく。

やってしまった。うっかりやってしまった、と。

殴られた怒りでつい反射的に殴り返してしまった、と。

冷静さを無くした人間は、最も愚かな選択をすると言っけれど、正にその通りだ。

ユアン「バロウズと言う少年はトラブルに巻き込まれやすい体質だ。

だがそれは半分彼の自業自得だった。

其の一、彼は不幸な体質だと言うこと。

其の二、彼は自分からトラブルの起こりそうな所に行く癖があること。

其の三、彼の行動はどこか空回りしてしまっていること。

其の四、彼は後先考えない行動をすること。

この四つの条件が雪だるま式に起こっていくと、彼はいつもトラブルの中心にいるのだ。

これぞまさに『雪だるま型トラブル方式』。

（ホント、この町に入ってから不幸続きだな）

ユアンは数秒固まった。その固まっている間にこの場の打開策を頭の中で練り上げる。

まず状況把握はできているから次に敵の行動パターン。左にいる赤いＴシャツの大男は見た目何も持っていないようだ。恐らく『魔道具』は使わないタイプだろうと推測。

そして右側の青いＴシャツの大男は、右手に黒を基調とした茶色いグリップのハンドガン型自動式拳銃を持っていた。ただの拳銃なのか、それとも力を使う『魔道具』なのかは分からないが。

（まあ俺的には実弾の方がいいんだが。でも結局のところ最終的に気をつけるべきはあの拳銃を持っている方の大男なんだよな。あつちは頭もキレそうだし。もう一人はノロマそうだからほっといてもいいだろ。どう見ても頭が良さそうにはみえねーし。ありや脳みそも筋肉でできてる面だからな）左の頬に冷たい汗が伝い、（よし、作戦はこんなもんでいいだろ。まあ半分は賭けなんだけど、この場から逃れるにはこの手しかもうない。安全なんて贅沢は言ってられねーよな、くそつたれ）

頭の中で打開策を作り出したユアンは、二人の大男に対し抗戦の身構えをして、

「お前、覚悟できてんだろうなゴラァ！」

と言う赤いＴシャツの大男の怒号と共に、二人の大男対一人の少年の死闘が開始する。

第一話（後書き）

第一章の一話目です。この話はまだ女の子は出ていませんがこれから出していききたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0510s/>

術の世界

2011年10月8日21時34分発行